

SSKO

ハイランドレポート
(高原通信)

Highland report !?

D.A.R.C 那須アディクションケアセンター
ニュースレター 第30号(2005, 9, 5)

今日一日

那須ケアセンターを支援する家族会
会長 水 井 清 次

私は薬物依存症者を抱える家族です。妻と3人の子供がいます。昭和48年に勤めていた東京の工場が閉鎖になり栃木の鹿沼に移って来ました。

本人が1歳の時です。その後本人は、高等学校を卒業して県内の工場に勤め始めましたが、しばらくすると工場を辞め仕事を転々として家で暴れたり27歳のときには余りにも様子が変なので警察に相談に行きました。

話を聞いてもらい担当者の方が言うには薬を使っているのではないかと問われ、まさか家の息子に限ってそんなことはないと言う思いで話を聞いていました。そこで模造品の薬を見せて貰い。結局、警察では「今度暴れたりしたら110番してくれば駆け付けます。」と言われただけでした。それから本人はおかしくなる一方で、私たちだけでは無理だと思い。親戚や本人の友達に薬の話をして協力をしてもらい使わせないために色々な努力をしてきました。

その後、住み込みの仕事を見つけて家を出て行き元気でやっているなと思っていた矢先に仕事を辞めて家に帰ってきて薬を使い始めていました。

一悶着あった末、仕方がなく警察を呼び15分ぐらいして5人の警官が来て取り押さえられ、部屋では注射器が見つかり連れていかれました。夜になって警察から逮捕をしたと電話が有り、私たち夫婦は心が色々な気持ちになり夜も眠れない日が続いていました。

そんなある日、県の精神保健福祉センターに薬物相談に行き、そこでガイドポストという集まりがある事を知り夫婦で参加しました。そこで初めて家族の人の話やダルクという施設の話を知ることが出来ました。翌日、茨城ダルクに相談に行き岩井さんの話を聞いて突き放しを実践する事にしました。

留置所に居る本人にダルクの本を差し入れし、あなたは薬物依存症という病気だと伝え、今後は施設に行くか自分だけで生きていくか刑務所しかないと話をして、どうするかは自分で決めなさいと伝えました。

裁判の後、ダルクのスタッフから本人が入寮したと電話を貰い久しぶりに安心していました。これで本人も回復を目指し頑張っていくのだろうと思っていましたが。そんなに簡単に行くわけが無く一週間後、玄関の前に本人が立っていました。

ビックリし、どうしたのかと思い家に入れてしまいました。話をシダルクに戻ると言うので朝になって駅まで送りました。

やれやれと思っていたら矢先、また施設を飛び出したと連絡がありました。やっぱり本人は家にやってきました。話をした所、あんな汚いところに居られないとか、あんな場所にいたら回復が出来ないとか本人の言うがままを信じてしまいNAミーティングに通うという事を条件にアパートを借りて住ませました。

5日後、ミーティングに連れて行くためにアパートに迎えにいくと仲間と薬を使っていたらしく部屋の中はグチャグチャになっていました。今度こそ、だめだと思いダルクの人をお願いをしました。アパートに戻り部屋の解約と片づけをしているとき無性に空しさや悔しさがこみ上げてきました。本人の言葉や行動に振り回されていることにやっと気付いたんです。

その後も本人はダルクを出て逮捕をされたり刑務所に行ったり色々な事をしています。これから先も何が起きるか分かりません。

だからこそ私たち夫婦は家族会に参加し続け同じ様な境遇にあった人、同じ悩みを抱える人たちと分かち合いをし「今日一日」という言葉を胸に少しづつですが変わって行きたいと思えます。

神さま、

私にお与えください

自分に変えられないものを

受け入れる落ち着きを

変えられるものは

変えていく勇気を

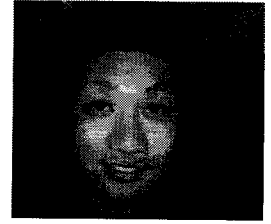
そして二つのものを

見分ける賢さを

帰ってきたパパア

依存症のパパア

僕が覚せい剤を使い始めたのは16歳の時です。きっかけは中学生の頃から音楽をやっていて卒業した頃からパンクバンドをやるようになり。音楽だけでなくバンドマンとしての生き方や考え方やイメージも追求していくようになり反社会的で狂っていて常識や世間体や決まり事にとらわれない、今までの自分と違った生き方に憧れていきました。そんな思いを音楽で表現していきたいと思い。



バンド＝薬というイメージがあり友達の中に薬を使っている人がいてその人に頼んで初めて薬を使いました。最初の印象はたいしたことが無いなという感じで寝る食べるといった事が出来ないだけでした。それからは何の抵抗もなく薬を使うようになりました。薬を使って寝ないで曲を作ったりとかライブハウスやクラブに行行ってすごくいい気分になったりとかステージの上にとって弾けたり自分が目指すものに対して一直線でとても充実した気分でした。これならやめる必要はないと思って使い続けました。それから薬を通じてたくさんの薬中と知り合い誘われる回数も多くなってきて薬の量や回数がどんどん増えて行きました。

だけど一年後にはあんなに楽しく使っていた薬がうまく使えなくなり被害妄想や追跡妄想や幻覚幻聴がでて周りの人が自分の悪口を言っていたりとか窓の隙間から銃口が見えて殺されると思ったりパトカーのサイレンの音が聞こえてきたり、どんどんひどくなっていきました。薬の効果が切れると動く気力がなくなったり、その頃、音楽学校に通っていましたが学校には行けないし友達との約束も守れないしバイトにも行けなくなりどんどん社会から遠ざかっていきました。あんなに大好きだったバンドの練習も行けなくなったり気がつく自分の周りには一緒に薬を使う仲間がいませんでした。

薬を使う目的が最初の頃とは変わってきていると自分でも気づき始めてきました。そんな中で追跡妄想や幻聴による見えない敵と戦うことに疲れ果てて18歳の時に警察に自首して逮捕されました。そんな形でしたが一ヶ月間薬を薬を使わず過ごせたということが自信になり安心しきっていました。でも薬の再使用が始まりました。こんなはずでは無い、もうやりたくないと思っているのに薬を使うことをやめられませんでした。そんな自分が嫌でしょうがないしどんどん友達や居場所が無くなっていくことに孤独を感じてやりきれない気持ちでした。

そんな自分を見て親が、もう家から出ていってくれと言ってきました。家を出ていけば仕事をしないと生きてはいけなし、そんな状況に追い込まれば自分はやっていけると出ていきました。一ヵ月後には仕事をやめておかしくなっていました。周りには心配してくれる人は誰も居なくなっていて、一緒に薬を使っていた薬仲間も、おかしくなっている自分を見て離れていきました。こんなになっても薬がやめられない自分に悔しくて涙が出てきました。それから暫くして親に薬を止めればダルクにいきなさいと言われ茨城ダルクに入寮しました。初めは凄くビックリしました。体中に入れ墨が入っている人や指が何本もない人達ばかりで、みんな自分とは歳が離れている

人ばかりだし自分はこの人たちとは違うと思いました。たしかに自分は薬がやめられなかったいろいろな悪いことはやってきたけど、この人たちみたいにひどくないという気持ちがしばらく離れませんでした。ミーティングをやったりプログラムをやったり仲間と色々な話しをしたりダルク生活をしばらく続けてみたんだけど一向に薬を使いたいという欲求はなくならないし自分が回復していったと言う実感がもてなくてすごくあせったし本当にこんな事やっていると薬がやめられるのかと不安な気持ちになりました。

もう自分にはダルクは必要ない、このまま居続けても時間の無駄だと思うようになりました。その事を仲間に相談したら「今まで薬を止めるために自分なりにいろいろな事やってきたんだろ！それでも止められなかったんだからとりあえずお前にとってダルクのプログラムは効果があるかないかは分からないけど最後までやってみてからはんだんしろよ！」と言われました。確かにその通りだと思いました。薬をもう使いたくないと思う気持ちは本当だし、そのために今までいろんな方法で止めようとしたけれど、どれも失敗に終わった事も事実なんでとりあえずやってみようと思いました。その中で薬の欲求は小さくはなるけど無くなることは絶対にならないと言うことに気づきました。欲求と戦わないで、どんなにつらい思いをしても薬は使おうとするし人になんと言われようが絶対に薬は止めないんだから、自分はそういうもんだということを受け入れて、そんな自分とこれから先どうつきあっていくかと言うことが大切なんだと思いました。

それから栃木ダルクを立ち上げるということで自分も今の施設長と一緒に栃木に移りました。ちょうどダルクにつながって一年がたった頃、自分はもう大丈夫だとか一年もダルクでプログラムをやったんだからもうやっているとやれるだろうと思うようになってきました。今になって思えばそれは薬を使いたいという気持ちやいつまでたっても社会に出れないと言う焦りであったり外に出て遊びたいと言う気持ちを正当化していたんだなあと思います。自分自身のことに目を向けられなくなってきて薬を使う、使わないと言う問題とか生き方の問題から目をそむけて自分は一年も薬を使っていないんだから大丈夫だと自分に言い聞かせて施設を飛び出しました。

地元に戻らず誰も知り合いの居ない町ならもう一度やり直す事が出来るんじゃないかと思っていました。最初の一ヶ月ぐらいは薬をを使わないで仕事もできていました。それから仕事にも慣れてきて初めて休みをもらった日に薬を使ってしまいました。本命の覚醒剤ではなかったんだけど施設に入って覚えたブロンを初めて飲みました。それまでは仕事を覚えるのに必死だったしもう絶対ダルクには戻りたくないと言う意地もあったので何かにとりつかれたようにがんばっていたんだけど休みをもらったので気が抜けてしまい。自分は今まで薬を使い続けていたことによって薬を使うこと以外の楽しみを知らないしストレスの解消の仕方も分からないんだとその時実感しました。急に休みをもらってさあ、何をしよう？と思っても何をしていいのかわからないんだと思いました。自分の生き方の問題の中に薬だけに限らず何かやりたいことを見つけたらそればかりをやってしまったまわりがみえなくなり最初は楽しくて始めたことでもだんだんそれをやっていたいなくなり楽しくもないのにやりつづけてしまう、生活全てがその事だけになってしまうと言うことがあります。バランスのいい生活を送ることができないと薬は止まらないと思いました。そのあともブロンをちょくちょく飲んでいて自分の職場に薬をやっている人が入ってきてまた覚醒剤

を使う生活が始まりました。それからまた仕事に行けなくなったり約束が守れなくなっている仕事を転々としながら薬を使いつづけました。借金もするようになり気がついたら二百万になっ

ていました。自分自信の行動をコントロール出来ない自分がとても恐くなりました。全く自分が信用できなくなっていました。

そんな中で今から五ヶ月前に個室ビデオの中で薬を使っていたら、今までに自分が傷つけた人の声が幻聴となって聞こえてきて怖くなり出れなくなりました。今になって思えば自分の心の中にある後ろめたい気持ちや不安な気持ちが幻聴となって聞こえたんだと思いました。もうどうしようもなくなってダルクの仲間に助けを求めました。いま5ヶ月間、薬を使っています。使いたくないのかというと、そんな事ありません。今でも薬を使いたくてしょうがないです。でも前回のダルク生活でもそうだったんだけどダルクに居る時だけは自分の気持ちがどうであれどんなに頑張っても止まらなかった薬が止まっています。

またいつ再使用が始まるかは解からないけど自分は薬中なんだからそれが当たり前と言う事を受け入れて自分はもう二度と薬を使わないんだという気持ちで自分にプレッシャーを与えてつぶれないように一日でも長く薬を使ってなくて良かったと思えるような生活をして行きたいと思っています。

お知らせとお願い

予定では10月初旬から宇都宮に相談室を開く運びとなりました。とても安く借り受ける事が出来てうれしい限りです。つきましてはそこで使う事務所の備品がまったく在りません。使わないものなどが在りましたら、献品をお願いいたします。

9月予定表

- 3日 つくば家族会
- 8日 藤原町更正女性保護会 施設見学
- 9日 とちぎつばさの会講演
- 14日 黒羽刑務所覚せい剤教育
- 16日 保護司 施設見学
- 20日 矢板OB会 施設見学
- 21日 黒羽刑務所覚せい剤教育
- 24日 きょうされん・とちぎ利用者分科会講演
- 25日 那須ケアセンターを支援する家族会
- 26日 小川町更正女性保護会 施設見学
- 28日 黒羽刑務所覚せい剤教育



8月献金を下さった方々

水井清次様、原茂様、那須ケアセンタを支援する家族会、大藤礼子様
田畑寿子様、近藤千春様、野崎正雄様、土屋澄子様、柴田幸作様
ひまわりクラブ様、古河カトリック教会様 匿名3名様

8月献品を下された方々

岡田光男様、永田欣也様、柳田一芳様、鈴木平四郎様、永田蓉子様
井澤和子様、野崎正雄様、アディクションサポートセンター那須様

発行所

郵便番号一五七一〇〇七三
東京都世田谷区砧六一二六一二一
特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

定価100円

編集

D.A.R.C 那須アディクションケアセンター
〒329-3225 栃木県那須郡那須町豊原丙 3227 番地 2
TEL 0287-77-7157 FAX 77-7158

Eメール n-cc@mte.biglobe.ne.jp

ホームページアドレス <http://www5f.biglobe.ne.jp/~NACC/>